

現代世界演劇

7

(全17巻別巻1)

不条理劇(2)

定価 二二〇〇円

一九七〇年二月一日印刷
一九七〇年二月二十五日発行

訳者

◎

中喜村 保男
志村 哲雄
赤喜 沢 寛

発行者

草野 貞之
田中 昭三

印刷者

株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(惣)七八二二(代)
振替東京三三二二八
郵便番号二〇一

理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 51570 (出) 6911

現代世界演劇

7

理劇(2)
社

Edward Albee.....BOX AND QUOTATIONS FROM
ルビー一箱と毛沢東語録 中村保男

CHAIRMAN MAO TSE-TUNG

Harold Pinter.....THE CARETAKER
カー管理人 喜志首雄

THE REAL INSPECTOR HOUND
T・ストップパードーほんとうのハウンド探部 喜志首雄

Tom Stoppard.....

C・テルロン一罪なき告発 赤沢 寛

Carlo Terron.....PROCESSO AGLI INNOCENTI
赤沢 寛

Alberto Moravia.....BEATRICE CENTI
解説 喜志首雄

A・モラヴィア一ベアトリッチェ・チエンチ

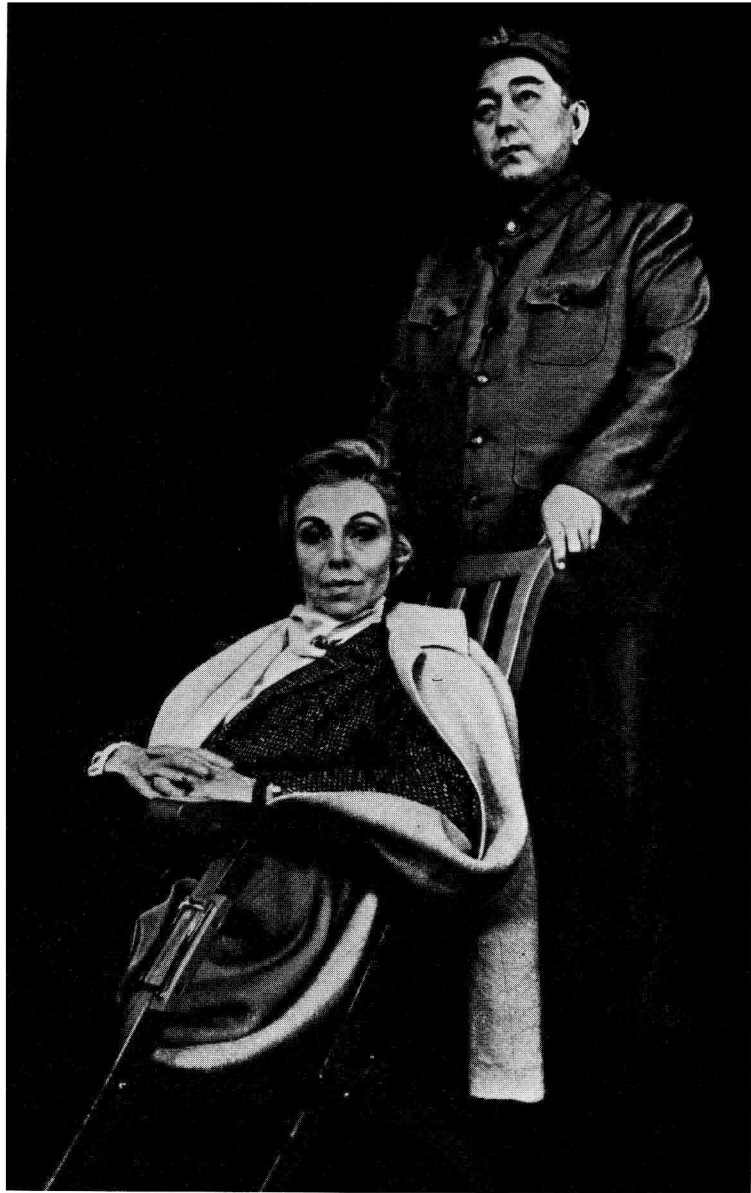
解説 喜志首雄





上、下、左頁上
ストップバード「ほんとうのハウンド警部」





オールビー「箱と毛沢東語録」

目次

E・オールビー作 箱と毛沢東語録	中村保男訳	7
H・ピンター作 管理人	喜志哲雄訳	61
T・ストップパード作 ほんとうのハウンド警部	喜志哲雄訳	127
C・テルロン作 罪なき告発	赤沢 寛訳	173
A・モラヴィア作 ベアトリッチェ・チェンチ	赤沢 寛訳	241
解題		341
解説 喜志哲雄		345

装幀
朝倉
攝

箱と毛沢東語録

エドワード・オールビー作
中村保男訳

Edward Albee

BOX AND QUOTATIONS FROM CHAIRMAN
MAO TSE-TUNG

© 1969 by Edward Albee, Japanese translation rights
arranged through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

序文

この短い戯曲二編——『箱』と『毛沢東語録』は、なるほど別個の作品であり、それほど時間を隔ててではないが別の折に構想されたもので、それぞれ独立しており、いずれか一方だけを上演してもさしつかえないものではあるが、わたしとしては、互いにからませて上演したほうが効果的であるように思う。

そればかりではない……『毛沢東語録』は、もしそれに先立って『箱』が書かれていなかったとしたら、十中八九、書かれずに終わったにちがいない作品であり、したがって『毛沢東語録』は、それよりも短い『箱』の副産物というか派生作品であり、その延長なのである。さらにまた、わたしは、これら二つの関連しあった戯曲において、主として音楽形式の演劇構成への応用という面で、二、三の実験を試みたのであり、『箱』を『毛沢東語録』をかこむパレンシシス（括弧もしくは間劇）として使ったのも、

この実験の一部にはかならないのである。

いまここで主張しておいたほうがいいと思うが、この二編の戯曲はごく単純である。というのは、手法的にはかなり複雑で、相当細かな注意を観客に要求するものではあるが、作品の内容は、さほどの困難なく理解しうる、という意味である。必要なのは——ごく簡単——ゆったりとくつろいで、劇を《起こらせる》こと、それと、自分がどのような演劇体験をしようとしているかについてあらかじめ先入観をもたずにこの演劇体験に接しようと志すこと、それだけである。

思い出すが、拙作の戯曲『小さなアリス』が数年前にニューヨークで初演されたとき、おおかたの批評家が劇評で（それがどんなものであったかはごらんのとおり）その戯曲は複雑かつ難解すぎて観客には理解できない、と書いたものである。批評家が、自分をまごつかせた作品なら必ず観客をも面くらわせるだろうと決めてかかるこの傾向については、いろいろ感想もあるが、それはさておくとして、『小さなアリス』上演についての批評家たちの報告記は、あの芝居を見た観客になんとも不思議な作用をもたらした。公開前のプレビュー上演のときには、観客は、ほと

んど最後のひとりに至るまでもあの芝居に対して好意的でなかったにもかかわらず、あの芝居の意味はしごくはっきりしていることを認めた。ところが、後日、批評家が発言したあとでは、観客はひどくまごついたのである。芝居そのものは、その間にいささかも変わっていなかったのに、ただそれに特定のレッテルが張られただけで、観客の体験するものはそのレッテルだけとなり、商品の中身はどこかへ吹き飛んでしまったのである。

劇作家は、逃避ロマンスを創作しているのならいざ知らず（もちろんそうすることだって立派な仕事であるが）そうでなければ、二つの義務を背負っている。ひとつは、いわゆる《人間》の状況についてなんらかの所説を述べることであり、二つは、自分が制作に用いている芸術形式の性質についてなんらかの所説を述べることである。いずれの場合にも、劇作家は変化を試みなくてはならない。第一の場合には――まじめな戯曲で現状を賛美するために書かれるものはきわめて少ないのであるから――劇作家は自分の住んでいる社会を変革しようと努めなくてはならないのであり、第二の場合には――芸術は動きつづけないかぎり萎びてしまうものであるから――劇作家は、先人たちがその枠内で仕事をしなければならなかった形式を変革すべく努めなくてはならないわけである。観客のほうも、これらの

目標――とくに第二の目標――に対して興味をもち、好意的な態度をよせる義務があると思う。したがって観客は、ひとつの作品をそれ独自の条件にもとづいて、あくまでもそのものとして体験しようと志す義務を（みずからに対しても、自分の参入している芸術形式に対しても、ひいては劇作家に対してさえも）背負っているわけである。

この二編の戯曲が（複雑であると同時に）単純なものであることはすでに述べたが、これらの作品は、ゆったりとくつろいで、それらの手法を既成のなじみやすい手法とひきくらべて考量することなく体験されたならば、まさしく単純以外のなものでもないのである。

エドワード・オールビー

箱

暗いまま幕があがる。ゆっくりと照明がとまり、大きな正六面体の箱が輪郭を現わす。箱は小舞台の空間をほとんど占める大きさでなくてはならない。客席に向かっている側面は吹き抜きになっているが、他の五面がはっきり観客に見えなくてはならないので、箱の内側は、たとえば裏の側面を小さめにするというふう
に、いくらかいびつにする必要がある。他の四面も正確な方形であってはならないが、この歪みの角度は、それ自体に観客の注意をひきつけて正立方体の箱という印象をそこなってしまうほど大きくしてはならない。箱を照らす光が十分に強くなると——幕切れで消えるまでこのかなり明るい光は一定の強さを保ちつづける——五秒間の沈黙。

声

（声は舞台から聞こえるのではなく、観客の近く——客席のうしろか横——から響いてくるような感じにしないでなければならない。声の主は女で、若くはないが老人でもなく、五十がらみといったところ。甲高い婆さん声でもないが、あかぬけた上品な声でもない。中西部の農家の女の声といったところが頃合であらう。

箱。

（五秒間の沈黙）

箱。

（三秒間の沈黙）

みごとな出来栄え。上等な組み……

（間）

……立てぐあい。箱。

（三秒間の沈黙。ずっと会話調になって）

内側はセディア・ドンダロを置ける広さがある。英語で言う——これはイタリヤ語なので——さしづめ、いや、どんびしゃり、揺り椅子。それにすわって揺り動く

ことのできる広さ。そればかりか、なかを動きまわることもできる……いくらかは。いや、十分に。

(三秒間の沈黙)

大工仕事はいまや減びつつある芸術のひとつ……いや、芸術というより工芸と言ったほうがいいかもしれない、古典的な名づけかたを好まない人のためには。ほかにもある。ほかに、工芸になりさがったうえにさらに落ち目になりつつある芸術が……壁、煉瓦壁つくりだとか、音楽だとか……

(間)

……お笑いになるかもしれないが、おいしいパンを作ることだとか、生きることだとか。とにかく多くの芸術があった。それがいまではどれもこれも工芸になり……そこでとまらずに、さらに落ちぶれている。けれども、これはしっかりしている、継ぎ目がびっちり……みごとな出来だ。たたいでも、手ごたえがない——手ごたえというのは、つまり、音のことだ。ずしんと響くが、うつろな音はしない。まったく上出来な品、材質もいいし、仕事ぶりもえらく几帳面だ、靴の底を磨いたという昔のよう……昔は靴底の真中のくぼみまで磨いたものだ。爪先や踵だけなら、そういうこともあったのだらうと思うだけだが……なんと、真中のくぼみまで。

(二秒間の沈黙。残念ながらというふう——しかし、あまり強くはなく)

そこへ、ほかの工芸が現われてきた……昔からの芸術を追いつけないまでも、それは……芸術の座を占めた。

(かすかな笑い)

自然は、多くのもの……非常に多くのものを忌みきらう、わたしたち人間をも——自然そのものが真空だと言われているから。

(五秒間の沈黙。目録を読みあげるように)

結末としての体系、つまり、目的としての方法という意味での。大きすぎて振ることができなくなったダイス。

(いくらかの恐れ、いくらかの悲しみをこめて)

七億の赤ん坊が死ぬ、練粉を捏ねて適当なパンの形にする——した——までの短い時間のあいだに。そう、むりもない、あれほど多くの者が……弧立して……命を絶ったのも。へばりついて生きつづけるかわりに、いやだと言ったのも。

(三秒間の沈黙)

無気力、そのせいなのだ、きっと。

(五秒間の沈黙)

必然性。そして進歩はたんなる方向、運動にすぎない。

(熱をこめて)

すべてが単純だったとき……

(かすかに、自嘲的な笑い)

ええ、そう、すべてが単純だったとき。

(三秒間の沈黙。あこがれるように)

美しい、美しい箱。

(三秒間の沈黙)

しかも、なかを歩いて、ひとまわりできるだけの広さ。

(ごくわずかの間)

もし教えられていさえしたら！ はっきりと、教えられていたならば！ あのと、すではっきりしていた、わたしたちがただ腐敗しているばかりでなく——腐敗していないものはない、少なくとも、わずかしかないのだから——そればかりでなく、腐敗しきって利己的になり、それを守るためなら死なねばならぬ……いっそ滅びてしまわねばならぬほどの腐敗に達していたことが。

(三秒間の沈黙。溜息まじりに)

おお、なんと。

(五秒間の沈黙)

それとも、問題はあのミルクだったのだろうか？ あれがきっかけだったのかもしれない——どんだんこぼして、あんなに多くの子供たちを殺した、立場を守るため

に。たかだか一セントか二セント——それも象徴でしかない金を——損しないようにするために。そう言えば、あの子供たちも象徴だったのだと思う、子供たちは死んでゆき、いつまでも死にやまなかったのだけれど。ものごとというものは、いったん始まると——あるところまでゆく——勢いがついて、手に負えなくなるものだ。それにしても、ミルクを捨てるなどとは！

(二秒間の沈黙。しっかりとした実感をこめて)

なんとという恥知らず！

(いくらか教師口調で)

ローマ法王はわたしたちに警告した。法王がそう言ったのだ。私有物というものはないのだ、と。無一物の人がいるかぎり、わたしたちには一物を所有する権利もないのだ。

(二秒間の沈黙)

問題なのは、些細なこと、小さな歪みだ。なるほど、ミルクが一ポンド流し捨てられるたびに、人はだれかに小切手を送ればよい、だが、それでは、覆ったミルクは瓶に戻らないのだ。こんなことが行なわれう、という事実、それが、小さくても容易ならぬ歪みなのだ。ふたたびパルティータに戻ったとき……ああああ、どうする、もしそれがあなたを泣かせたら!? その美しさに泣くの

ではなく、ただひたすら喪失……かくも貴重な喪失に人は泣くという理由から。芸術が傷つけはじめるとき……芸術が傷つきはじめるとき、それは周囲に目をくばるべき時だ。そう、そうなのだ。

(三秒間の沈黙)

そう、そうなのだ。

(三秒間の沈黙)

もはや、すべてのものにより多くあなたを連れてゆく大いなる美だけでは十分でない、思い知らせることが必要なのだ！ それも、どうなりうるかということをではなく、どうなっているかということを。そう、芸術が人を傷つけるそのとき……

(三秒間の沈黙)

箱。

(二秒間の沈黙)

そして、動きまわれるだけの広さ、蠅はばのようにには動きまわれないけれど。もしそれができたら、どんなにすばらしいことか！

(悲嘆)

そう——でも、ほかにもたくさんある、もしできたら、どんなにすばらしいかということは。

(二秒間の沈黙。教師口調で)

ここに、緊張と、トニック（主調音、気つけ）の問題がある——きわめて重大な問題が。

(間)

緊張を解くということは、協和の状態へ、協和音へ、ふたたび戻ることである。どんなに遠くへ出かけていっても、人は必ず戻ってくる、ぐるりとひとまわりしてではなく、出発点へでもなく、むしろ……ふたたび腰を落ちつけ、定着するということ。そして、芸術の美は秩序ということである——必ずしもすでに知られているなじみのものとはかぎらず、あくまでも、秩序……それ独自の条件にもとづいた秩序。

(二秒間の沈黙。溜息ためいきまじりに)

かくも多くが……飛ぶ。十億の鳥がいっせいに、黒い網となつて大海原を——あるいは、あのときにはあの島モナークスを——かすめて、風に吹かれながらも一直線に進む……一定の方角に向かって。秩序！

(二秒間の沈黙)

六面もある、すべてそれをはねかえさせる面が、六つも。

(三秒間の沈黙。ふたたび勇ましく)

その美がわたしたちに、到達可能のものではなく、喪失を思い知らせるとき。わたしたちが持つことのできな

いものがあるかをそれが教えるとき……そのときには……もはやそれは語らず、結びつかず……為し能わないのだ。それが音楽の当面している問題なのだ。それが、もはや音楽を聞くことのできない理由なのだ。

(間)

なぜなら、わたしたちは泣いているのだから。

(三秒間の沈黙)

そしてだれかが、男でも女でも……どうしてあなたは泣くのです？　ときいたとき、正直に答えられることが、ただひとつ、《芸術が傷つけるから……》であったとしたら……

(かすかな笑い)

まあ、それでも、しかたがない。

(五秒間の沈黙)

見なさい！　さらに鳥がやってくる！　また……空をおおって。

(五秒間の沈黙)

これは、庭園や直線がどうのこうのという問題でも、それどころか……道徳の問題でさえも、ない。問題なのは、あなたが戻ってこれられないとき——かけ離れた調子、遠隔調をあなたがとったとき——そこであなたがトニック！　トニックを！　と言っても、みんなは、なん

のこと、それは？　と言うとき。そのときなのだ、問題なのは。

(三秒間の沈黙)

あれを！　またやってくる！　千羽もがひと塊かたまりになって、そしてその下を一羽だけ、遠く飛んでいる、反対の方角へ！

(二秒間の沈黙)

あれはなんだったろう、よくわたしをふるえあがらせたあれは？　警鐘を鳴らす浮標ブイと、錨かぎ——その音と鳴き声、夜、霧の夜のその音と声、それがわたしをおびえさせたものだ。

(かすかな笑い)

まだ一度もそれを見ることがなかったのに——その音を聞いたこともなかったのに。

(いくらかの驚異をこめて)

でも、わたしにはわかっていた、それがどんなものであるかということが……海から千マイルも離れた土地にいて。山にかこまれて、一度も外へ出たことがなかったのに……それでも海の音が……

(三秒間の沈黙。きわめて淡々と)

とにかく、わたしたちはなにも、ともでも存在することができ——外にいるかぎり。わたしたちは、ほとんど